

# 日高誠様の思い出

家族会員（土37連岡高明氏長女）

蓮岡 宏子

58期の「花だより」を長く担当され、同期生会のお世話や『偕行』でも活躍された日高誠様が逝かれて初めての8月が過ぎました。8月は日本にとって非常に重い月です。

日高様は愛国、憂国の念を強くお持ちで戦死者に対しても誠心誠意の供養を続けておられました。

最晩年、歩行が不自由になられても手押車を押しながら倒れるまで活動されていたお姿が髣髴として浮かんできます。

長いご生涯のそれぞれの時代、時期には何人もの方々が日高様への挽歌をお持ちのことと思いますが、私は非常に尽力され出版された本の中から、父に贈呈していただきました書籍などについてお偲び申し上げます。

まず、『遙かなりレイテの山々』これは陸予士の恩師で当時区隊長であった田村芳夫氏と部下の方々への鎮魂の書であります。

田村氏は大隊長として歩兵第49聯隊の方々を指揮され、昭和19年12月レイテ島カナンガで壮烈な戦死を遂げられました。

日高様は、かねて心にかけておられた参拝を平成元年、非常に周到な準備と心くばりで同期生の方々数名と企画し参拝団を結成、ご遺族をご案内してみごとに参拝慰霊を実行なさいました。当地で慰霊祭を実施、歩兵第49聯隊の方々、第12師団や慰霊碑のあるところをできる限り巡拝されて、大勢の英霊にご供養を捧げられました。日本人として、この誠心誠意のまごころが区隊長様はじめ皆様にしつかり届いて、うれしくなつかしく思ってくださいったと思います。

この本は翌年、平成2年に記念誌として刊行されましたが、さらにこのときの委員5人の方々とともに、7年後の8月にご遺族とともにカナンガにおもむき、二度目の参拝をされました。翌年、続編として発行されたのが『続 遙かなりレイテの山々』です。2冊とも単にお偲びしでの追悼集というだけでなく、記念誌としては発刊されました。戦後45年も経っていたときに、こ

れほど皆様に慕われる田村区隊長殿の薫陶、訓育、生徒さん方への愛情など、ご人格は申すに及びませんが、皆様方のお気持ちの一致、企画実行されるまでの献身的なご尽力の日々は大変な努力の積み重ねであったことと沁々と感じます。そしてこの参拝に協力され、関係された方々の寄稿を改めて拝読し、日本人としての誇るべきまごころに非常に感銘を受けました。田村夫人は100歳を超えておられますが、ご家族も一緒に幸せに過ごされ、この2冊は常に傍らに置いてときどき見ておられるということです。

それから日高様は平成3年10月に聯隊旗手で戦死された後呂亥年生氏（土57）の御遺骨発掘と慰霊参拝にフィリピンのセブ島に行っておられます。長兄後呂滋氏と草間勝茂氏（土57）と出かけられ、平成6年6月に編集責任者として『聯隊旗手後呂少尉追悼録』を発行されました。『日高堅太郎追悼録』（平成7年発行）。これは昭和19年3月に歩兵第45聯隊大隊長としてソロモン群島ブーゲンビル島タロキナで壮烈な戦死をされた長兄堅太郎様（土51）と部下の方々への鎮魂の書です。靖國

神社50年祭を過ぎてからの調査や真相を把握するための努力や時間はどれほど大変なことであったか、推察申し上げるのみですが、ソロモン戦誌編纂にも参加され、その後、タロキナ現地調査をされ慰霊参拝をしておられます。そして全てご自身で製本、印刷、製版などなさったということで、そのご努力ご苦労は想像以上であると思います。

大勢の部下の方々に慕われ、尊敬されていた薩摩隼人、戦死された長兄への尽きせぬ愛惜の至誠が、このご本になったと思ひ再読いたしました。内容に関しては書こうか書くまいかと迷う事柄もあつて決心には時間がかかったけれども、目的を日高家の子孫に遺すと決めて、敢えて記述され、ご自身のお考えや結論も書かれたということでした。

どの社会も様々ではあります、そして極限状態に置かれた人間がどうなつていくのか、私には想像が難しいですが、終戦後、軍人という批判、非難の的になつた時期もありました。しかし、人間として、軍人として品格を備え、かゝる軍人ありきと誇らしく、大声で言いたい人格の方々も何人もいらつしやると

思っています。私は父亡きあと何  
回か同期生会に参加させていただき  
ました。必ず、靖國神社正式参拝か  
ら始まり、皆様で戦死された方々へ  
深い思いを捧げられ、それから和や  
かな懇親会へと続きました。日高様  
は司会をしておられました。皆様方  
は長年の辛い苦しい時代を過ごされ  
ても、なお昔ながらの純粹で共通の  
想いは変わらず、気合のこもった中  
にも、皆様方の中に交流し続ける清  
冽な流れを感じつゝ、よい時間を過  
ごさせていただきました。

平成18年3月発行『福祉の道ひと  
すじに』。これは58期磯村光男様の  
遺稿集ですが、レイテ参拝にも同行  
され、力を尽くされた方です。その  
後、病を得て平成16年秋に亡くなら  
れました。終戦後、お若いときから  
社会福祉、老人福祉の問題に取り組  
まれ、国内各地はもちろん。要請に  
応じてブラジルでも講演され、老人  
クラブ連合会の事務局長もされた方  
です。

今日「敬老の日」があるのも、こ  
の方のお陰ということですよ。奥様の  
許に残されていたたくさんさんの遺稿  
を、日高様がお読みになり、長谷川  
様、増田様とともに感動されました。

そして、この問題を示唆し、尽力  
貢献された功績をたたえて、同期生  
の誼というだけでなく、1年かけて  
編纂、編集を重ねてできあがった本  
です。

磯村夫人もお若いときから、地域  
の老人会をはじめとして多くのこと  
に活躍、努力を続けて来られました。  
90歳になられました。今も意気軒  
昂でおられます。奥様もおよろこび  
でしたが、私もこの本を拝読して初  
めてこれらのことを知りました。

私の父は37期ですが、昭和16年頃  
からは陸予士第11中隊の中隊長とし  
て57期、58期、59期の生徒さん方と  
のご縁が始まりました。そして、こ  
れは父の生涯の大きな幸せになりま  
した。

これは終戦後もずっと続き、皆様  
方との交流は父の生き甲斐でありま  
した。父も長い間、最晩年まで「花  
だより」を担当していました。没後  
にも数人の方々と奥様方とのおつき  
合いは、今も続いております。切っ  
ても切れない絆をいただきました思  
い、私はこの方々との交流に感謝と  
誇りを持ってうれしく思っています。  
長い間、誠に有難うございました。

日高様は目標と目的があつたとき  
には、あたりまえのように、特に説  
明もなさらず、ご自分の信念に基づ  
いて抜群の集中心力、行動力を持って、  
誠心誠意、献身的に尽くされました。  
父についても終生変わらぬ、あらゆる  
場面で温かく支えてくださいまし  
た。

神仏への崇敬篤い日高様のみ魂  
が、神仏に護られて、日高様らしく  
ほがらかで、安らかにお幸せでい  
らっしゃいますよう、心底より祈  
り申し上げております。